



この人の 沖縄力

37 おきなわりよく
いつも前向きで
決して後ろを振り返ることなく、
自由奔放に人生を切り開く、
ウチナーンチュの
バイタリティーのこと。



独創的な植物画は、じっと観察することから始まる。
右上は、商品化にこぎつけたジャムやハーブソルト。

ハーブを育て ハーブに 癒やされて

たけにし ようこ
高西洋子さん(石垣島)

文 太田雅子 撮影 嘉納辰彦

「今日はカモマイルのお茶にしましよう。あら、雨で花びらがみんな眠っちゃってる。あとで起きますよ。ねっ、かわいいでしょ？」
花を摘みながら、「石垣島ハーブガーデン」代表でジャパンハーブソサエティー会員の高西洋子さん(52歳)が言う。約1500坪の敷地に80種以上のハーブを育て、絵を描き、お菓子や料理に生かし、

「おばあたちから『こんな小さな子が……』と驚かれたほど。野山を駆け巡り、どこに野イチゴがあるとかミカンがあるとか、全部知っている。山の大將でした」
石垣島の商業高校を卒業後、島に戻り、旅行社に勤務。22歳で職場結婚した。夫の章さんは、島で評判のイケメンで、「グンバイヒルガオの花咲く岩影で波の音を聴いたり、月明かりの白浜で語り合ったり……。絵に描いたようなロマンチックなデートを重ねて」ゴールインした。

与那国島で4人姉妹の長女として生まれた。「ランドセルを背負う前から」植物が大好きだった少女は、野や山から植物を採ってきては庭に植え、小学校に上がるころには、挿し木の方法も自然に覚えていた。

「子どもはさぞかし珍しかったのでは？」
「子どものころ、タンポポやスミレを味试着いて、ヤギが1つ1つ

ポプリや石鹸やクラフトを作る。ハーブのことならなんでも、というハーブコーディネーターだ。
「ハーブは自分で育てて暮らしに生かすもの。育てていると、植物の気持ちが変わってきます。今、水をほしがってるなとか、やがて赤ちゃん(種)が生まれるぞとか」
それにしてもこのガーデン、かなりワイルドだ。いったいどれがハーブで、どれが雑草やら？
「私、雑草とらない主義なんです。雑草抜くと、ハーブが強風や病気にやられたりするので。農薬や除草剤も入れないから、コオロギやミミズもいて、全部生かされている感じ。植物は、種から育てて花を咲かせ、やがて枯れるまで、すべてが美しく愛おしい存在です」

「ハーブが癒やした傷」
2男1女に恵まれた洋子さんの植物愛好家ぶりは、子育てのなかでもいかに発揮された。
「コーンスープにクミスクチンの花を浮かべたり、ラーメンにタンポポ浮かべたりすると、子どもたちが手をたたいてはしゃぐのよ」
今でこそ、エディブルフラワーとして、花を食べることも珍しくなくなりましたが、当時はさぞかし珍しかったのでは？

島のハーブは元気がいい。ポットで育てたひ弱なハーブと違って、大地に力強く根を張っているから、青草の匂い、花蜜の香りが濃密だ。深呼吸すると、体中にいい気が満ちてくる。

植物はすべて愛おしい

Coraway 2007 Mahaa 52